

| | | | | | | | |
|-----------|---|--------|----|------|------|--------|---|
| 申請者 | 学科名 | 保健福祉学科 | 職名 | 講師 | 氏名 | 周防 美智子 | 印 |
| 調査研究課題 | 小学生のうつ状態と問題行動 —追跡調査による検討— | | | | | | |
| 交付決定額 | 350千円 | | | | | | |
| 調査研究組織 | 氏名 | 所属・職 | | 専門分野 | 役割分担 | | |
| | 代表 | | | | | | |
| | 分担者 | | | | | | |
| 調査研究実績の概要 | <p>1. 研究目的・方法</p> <p>近年の児童生徒の問題行動の増加に対し、児童精神医学領域では子どもの問題行動を抑うつの視点から検討することが必要だと指摘している。筆者は2009年度から2013年度にかけて、学校現場における子どもの抑うつ状態と問題行動の関連を検証してきた。2014年度から、これまでの研究結果を発展させ、子どもの抑うつ状態と問題行動の関連が環境や発達年齢の影響によってどのような変化を表すかを検証し、抑うつ状態と問題行動の改善に向けた支援を検討するための追跡調査を開始した。</p> <p>本研究では、昨年度の調査対象であった小学生を今年度追跡調査し、実態把握、分析・検討を行った。調査は、Birlersonの子ども用自己記入式評価尺度（DSRS-C）と、教師の行動評価（①行動が年齢より幼い、②座ってられない落ち着きがない、③やっではいけないことをしても悪いと思わない、④暴言や暴力がある、⑤物を壊す、⑥学習意欲がある、⑦休み時間の友人交流がある、⑧学校生活全般に元気がある、の8項目）による質問紙で行った。DSRS-Cは、フルスコア36点でカットオフスコア16点以上を抑うつ状態と評価した。対象は、2013年度研究協力を頂いたA県の3小学校1年生から6年生1,532人と担任51人である。調査は2回実施し、1回目は7月に、2回目は12月に行った。分析は分析ソフト（SPSS20.0）を用いて、有効回答（1回目1,528人・2回目1,514人）を対象に分析・検討を行った。本研究は、岡山県立大学倫理委員会の承認を受けている。</p> <p>2. 研究結果</p> <p>分析対象の内訳は、7月は1年生152人（9.9%）、2年生174人（11.4%）、3年生291人（19.0%）、4年生306人（20.0%）、5年生312人（20.4%）、6年生293人（19.2%）の</p> | | | | | | |

1,528人で男子766人(50.1%)、女子762人(49.9%)であった。12月は、1年生156人(10.3%)、2年生176人(11.6%)、3年生285人(18.8%)、4年生307人(20.3%)、5年生304人(20.1%)、6年生284人(18.8%)の1,514人で、男子758人(50.1%)、女子756人(49.9%)であった。

DSRS-Cの平均得点及び標準偏差は、7月の調査では、 9.2 ± 5.43 点、12月の調査においては 9.11 ± 5.61 点であった。抑うつ状態を示す児童は、7月の調査では、1,528人中202人(13.2%)で、12月の調査では、1,514人中211人(13.9%)となった。カットオフスコア16点以上の抑うつ状態を示す児童を下表に示した。調査対象3校で、抑うつ状態を示す児童に大きな差は見られなかった。

DSRS-Cの得点が抑うつ状態を示す児童(%)

| | 1年生 | 2年生 | 3年生 | 4年生 | 5年生 | 6年生 | 全児童 | 男子 | 女子 |
|-----|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
| 7月 | 9.9 | 17.8 | 14.8 | 11.1 | 15.4 | 10.6 | 13.2 | 15.0 | 11.4 |
| 12月 | 13.8 | 19.1 | 11.3 | 13.4 | 18.1 | 9.2 | 13.9 | 14.9 | 13.0 |

カットオフスコア16点以上と行動を重回帰分析したところ、7月の調査及び12月の調査とも『暴言や暴力がある』『休み時間の友人交流がない』の項目に関連がみられた。

また、7月の調査で抑うつ状態を示した児童202人のうち、12月の調査でも抑うつ状態を示していた児童は105人で、約50%強の児童が両調査ともに抑うつ状態がみられた。7月の調査で抑うつ状態を示した児童のうち、1年生33.3%、2年生48.4%、3年生44.2%、4年生58.8%、5年生62.5%、6年生51.6%が12月の調査でも抑うつ状態を示した。両調査とも抑うつ状態を示す男女の比率は、ほぼ同じであった。

調査研究実績
の概要

3. 考察

抑うつ状態を示す児童はどの学年にも存在し、抑うつ状態が行動に影響している可能性が明らかとなった。抑うつ状態に伴う行動で、集団生活に困難が生じていることが推測され、学校現場で集団不適合といわれる問題行動を起こしている可能性が示唆された。

また、追跡調査の結果、2回の調査において抑うつ状態を示す児童を学年別に見ると、低学年より高学年の値は高く、高学年になるにつれ抑うつ状態が継続している可能性がある。性別と抑うつ状態の関連では、一般的に女子が男子より抑うつ状態を示しやすいと言われているが、本研究では、男子のほうが少し高い値となっている。筆者の今までの小学生を対象とした調査では今回と同様の結果が得られていることから、今後児童期における抑うつ状態の特性についても検討を深める必要がある。

以上のことから、小学生の問題行動に対し、抑うつ状態の視点をもって問題行動の改善に取り組む必要があると考える。また、学校現場におけるメンタルヘルスについては今後重要な課題であると考えられる。

4. 今後の研究課題

本研究については、分析途中であり、両調査に抑うつ状態を示した児童、抑うつ状態が改善した児童、抑うつ状態がみられるようになった児童、昨年度の調査データとの比較などから、抑うつへの影響要因を検討し、行動との関連を明らかにする予定である。また、本報告では述べていないが、中学1年生(昨年度の6年生)の追跡調査の分析結果を踏まえ、児童生徒の抑うつ状態と行動の関連を解析し、児童生徒の抑うつ状態と問題行動の改善にむけた支援を検討したいと考える。

成果資料目録

平成27年度に学会発表および論文投稿予定。